

2 ブラック・ベス

I.

恋する男に愛しい恋人の美しさを語らせよう  
恋煩いの一篇の詩に その魅力を讃えさせよう  
お粗末な俺の詩で うそ偽りなくこの愛を伝えよう  
俺の愛しいブラック・ベス

II.

母馬は西の生まれ 父馬は東の生まれ  
脚の疾さは父馬譲り 気性の荒さは母馬譲り  
この国にこれほどの血を受け継ぐ馬はいない  
俺の愛しいブラック・ベス

5

III.

なあ見てくれ 松明のように輝く眼球  
誇らしげに弧を描く首に 立派に広がる鼻孔  
流れる 蠶の絹のようなひと房ひと房が  
無二の美しさを際立たせる 俺の愛しいブラック・ベス

10

IV.

ひと筋の白毛も無い闇夜のごとき漆黒の  
ベルベットのように滑らかな黒肌  
血管の浮くその首は 愛撫せずにはいられない  
綺麗だろう 俺の愛しいブラック・ベス

15

V.

街道も脇道も 風吹き荒れる日も穏やかな日も  
何千マイルもの道程を 俺たちは駈けてきた  
同じ藁を寝床にして 同じ飯を食ってきた  
こんな恋人がいるかい 俺と愛しいブラック・ベス

20

VI.

月夜も闇夜も 夜も昼も  
果敢に駈けるベスを止めるものは何も無い  
どんなに長い道のりも疲れ知らずに駈ける  
これほどの駿馬はいない 俺の愛しいブラック・ベス

## VII.

あるときチェシアのダナム近くでのこと 25  
 俺は一人の騎手<sup>うまのり</sup>を見つけ 出会い頭に止めてやった  
 そうさ そいつの懐を軽くしてやったのさ  
 お前に乗れば朝飯前だ 俺の愛しいブラック・ベス

## VIII.

奴は俺に気づいたようだ 「ディック・ターピン 30  
 お前は絞首刑だ 首を洗って待ってるよ」  
 俺はそいつの脅しを鼻で笑ってやった  
 お前とだったらアリバイだって作れるさ 愛しいベス

## IX.

ひとけ  
 人気のない深く険しい峡谷の  
 鬱蒼<sup>うっそう</sup>とした森に覆われた暗い道  
 土手をよじ登った時 拍車がお前の脇腹を傷つけた 35  
 すまなかったな 俺の愛しいブラック・ベス

## X.

藪や小川や草原や畑を お前は軽々と越えていく  
 鴉が自在に飛ぶように 道を違えず<sup>たが</sup>駈けていく  
 五分もかからず俺たちはハフグリーンに辿り着いた  
 俺の首はつながった ベスの脚のおかげでな 40

## XI.

何食わぬ顔で降り立って草の上をぶらついた  
 町中の者たちの目に触れるよう注意を払った  
 地元の名士たちに「時は飛ぶように過ぎるもんだ」と話しかけた  
 だがお前が飛ぶように駈けたことは内緒さ 俺の愛しいベス

## XII.

「まもなく四時だな」と言いながら 45  
 俺はのんびり酒を片手にカードゲームに興じた  
 だが次の勝負だと思った途端 <sup>チェックメイト</sup> まるで王手だ  
 例の騎手<sup>うまのり</sup>が愛しいベスと俺を捜しにやって来た

## XIII.

どうなったかって 俺の勝ちに決まってるだろ  
 奴が追剥にあったのも 名士たちが俺を見たのも同じ時刻 50  
 俺が盗みを働いたのは四時 だが名士たちは断言した

その時刻俺が静かに飲んでいと 愛しいベスのおかげでな

XIV.

さあ皆の衆 盛大な喝采を送ってくれ

随一の駿馬 勇敢で忠実なブラック・ベスに

後世の騎手<sup>うまのり</sup>たちもその栄光を讃えるだろう

55

追剥ターピン様の馬 愛しいブラック・ベスの栄光を

(宮原牧子訳)